

研究資料

珊瑚会資料集（補遺その二）

菊屋吉生・塩谷 純編

珊瑚会は大正期、平福百穂や小川芋銭、川端龍子といった作家が集い、作画活動を行った日本画の小団体として知られている。すでに『美術研究』では、第三七七号（平成一五年二月）で菊屋吉生が「珊瑚会論考」を発表し、また第三七六号（平成一四年三月）で「珊瑚会資料集」、第三三七七号で「珊瑚会資料集（補遺）」と題して、同会に関する資料の集成を行った。本稿もこの資料集成に連なるもので、未紹介だった雑誌『新作精華』第三巻第二輯に掲載の図版資料を採録するが、前回の資料紹介より六年を経過していることもあり、まずその間の珊瑚会研究の進展について、簡単に述べておきたい。

珊瑚会に関する論考としては、井澤英理子氏による「珊瑚会の活動に見る大正期日本画の―様相―」（『山梨県立美術館研究紀要』第一七号 平成一五年六月）がある。平成一〇年に山梨県立文学館と山梨県立美術館が共催した「画文交響 飯田蛇笏をめぐる画人たち」展の成果をふまえ、とくに珊瑚会メンバーと『ホトトギス』や『雲母』といった俳句雑誌との接点を指摘し、各作家毎に文芸との関わりを丹念に整理しているのが注目される。

本稿の編者の一人である塩谷は、「再興日本美術院のひとびと―あるいは大正期の大観」と題する論考で、再興日本美術院の中での珊瑚会の位置づけを試みた（『東京文化財研究所編『大正期美術展覧会の研究』中央公論美術出版 平成一七年五月）。美術院の中では異色とされる珊瑚会メンバーの加入の背景に、同院洋画部の中心だった小杉未醒の広範なネットワークを想定して論じている。

展覧会では、平成一八年に練馬区立美術館・山梨県立美術館で「光の水墨画 近藤浩一路の全貌」展が開催された。珊瑚会に参加していた近藤浩一路の回顧展だが、

珊瑚会、および浩一路をはじめ複数の同会メンバーが名を連ねていた東京漫画会にもスポットを当て、両会活動期における諸会員の作品も交えた展覧となった。

なお珊瑚会の会務を行っていた中島重太郎について、既出の「珊瑚会資料集」（『美術研究』第三七六号）を受け、岩切信一郎氏が「再考・版元中島重太郎の版画集発行―昭和の戦時中の版画発行広告より」（『二寸』第一六号 平成一五年一〇月）で注意を促している。「再考」とあるように、岩切氏はそれ以前に「創作版画倶楽部の主宰者 中島重太郎」（『二寸』第五号 平成一三年一月）を著し、さらに西山純子氏が「版画屋 中島重太郎」（『千葉市美術館研究紀要 採蓮』第四号 平成一三年三月）で詳細に論じているので参照されたい。

本稿で紹介するのは、精華社発行の『新作精華』第三巻第二輯（大正九年二月）に「珊瑚会號」として掲載された作品図版二十点である。本資料については、前掲の「光の水墨画 近藤浩一路の全貌」展を担当された野地耕一郎氏より御教示いただいた。すでに「珊瑚会資料集」（『美術研究』第三七六号）で、『新作精華』第二巻第二輯（大正八年四月）に同じく「珊瑚会號」として掲載された珊瑚会第五回展（大正八年四月一日―一五日）出品作の図版九点を収録しているが、同誌の第三巻第二輯にふれるのは本稿が初めてである。そこで本稿では、珊瑚会について現在確認される限り二度の特集を組んだ雑誌『新作精華』について、まずそのあらましを述べておきたい。現在、東京文化財研究所には（第一巻 第三輯（大正七年九月）から第四巻第一輯（大正一〇年一月）まで、途中欠号を除き計十一号分の『新作精華』が所蔵されている。⁽¹⁾

奥付には編輯兼発行印刷者として小林壽一の名があり、発行所は精華社となっている。小林壽一について詳細は不明だが、大正期に美術叢書刊行会より刊行された『美術叢書』のうち、『浮世絵』（大正六年）、『日本の風景画』（大正八年）の著作があり、また大正八年一二月に行われた佐竹本三十六歌仙絵巻の切断・分売の折、藤原朝忠の一点を五千元で買った人物としてその名が見える。⁽²⁾ 精華社については、大正三年に再興された日本美術院の出品図録を第四回展（大正六年）まで手がけ、また『観山画集』（大正四年）、『大観画集』（大正五年）、『春草画譜』（大正六年）と日本美術院関係の画集刊行に多く携わっている。



挿図3 石塚翰《ほろゑひ》

挿図1 『新作精華』第二卷第二輯の表紙



挿図2 石塚翰《晴雪》

挿図4 池田永治《三春の雪》



挿図7 池田永治《一盞寒燈》

挿図5 池田永治《街東酒薄》



挿図8 池田永治《杯酒無味》

挿図6 池田永治《把酒承花》

挿図9 小川芋銭
《浮虚舟》



挿図 10 小川千甕《曲水の遊》



挿図 12 川端龍子《秋光搖浴》



挿図 11 小川千甕《田舎楽》



挿図 14 山村耕花《不死のくすり（双幅）》



挿図 13 川端龍子《猿酒》



挿図 17 近藤浩一路《水郷》



挿図 15 山村耕花《湖の夕》

挿図 18 平福百穂《杯中の花》

挿図 16 近藤浩一路《鳥影》



挿図 21 森田恒友《枯れ蘆（田野冬日の内）》



挿図 20 森田恒友《田の面（田野冬日の内）》



挿図 19 平福百穂《王祥》

今回新出の『新作精華』第三巻第二輯巻末に「本書の摘要」として「本書には評論なく時事なし、未だ世に公刊せられざる寔の新作の精華を世に稱揚せんとして生る」とあるように、同誌は新作の日本画を対象に、専らモノクロ図版のみで構成された冊子である。同じく第三巻第二輯巻末には「本書の特色」として、以下の五項目が掲げられている。

- 一、材料が豊富 弊社は材料の撮影蒐集に労費を吝みません諸先生及び藏幅家諸賢より新作の珍品御報次第速刻参上いたします
- 一、寫眞の鮮明 特種の乾板を輸入し特種の撮影法を採用してゐます他社で撮つたのと同じの畫を比較して下さい
- 一、体裁の優雅 表紙の装釘は毎輯川端龍子先生の筆になり木版着色極めて優雅客室の備品として絶好であります
- 一、用紙の優良 現時の製紙力最上の優良紙を用ひ印刷又幾多の苦心を重ね原畫と異なるなきを期して居ります
- 一、價の低廉 諸材料暴騰の今日價の至廉なるは弊社の獨得であります

右にもあるように、『新作精華』の表紙(挿図1)は各号で図様を変えながら、毎号単色もしくは二・三色刷りの木版画で飾られ、その原画は雄渾な筆致からしても、全号を通じ珊瑚会の一員である川端龍子の筆によるものだったと思われる。

さて『新作精華』第三巻第二輯に収録された作品二十点だが、「珊瑚會號」として作品名と作家名が列記されている他に、展覽会情報や展評の類は同誌中には見出せない。しかしこれまで収集した珊瑚会の展評(前記「珊瑚会資料集」を参照)、および同誌の発行年月(大正九年二月)から、それらが「大正九年一月二五日」二十九日に日本橋高島屋で開催された珊瑚会第六回展の出品作であることが判明する。それらの一部は『中央美術』や『美術画報』といった他誌でも図版が紹介され、すでに「珊瑚会資料集」に再録したものもあるが、本稿では重複を恐れず『新作精華』第三巻第二輯が収める作品図版全てを再録している。

同誌掲載の出品作を概観するに、珊瑚会の特色とされる俳画的・漫画的傾向はこ

こでも充分に看取されよう。当時の諸展評によれば、第六回展では「酒」という題が課されたようだが、東京漫画会の会員でもあった池田永治の《街東酒薄》《把酒承花》《一盞寒燈》《杯酒無味》は、まさに珊瑚会ならではの戯画戯文調の作といえる。その一方で、今回図様が明らかにした作品の中には、珊瑚会風とはいささか趣の異なるものも散見されて興味深い。たとえば石塚翰の《ほろゑひ》は、脱俗の気風のある珊瑚会にあって、むしろ大正期の美人画に通ずるデカダンスの匂いを漂わせている。また小川千甕の《曲水の遊》や山村耕花の《不死のくすり》は、当世風俗をモチーフとすることの多い珊瑚会には珍しく古典を題材とした作例だが、この時期再興院展に入選を重ねていた玉村方久斗の作との類似性を思わせ、とくに千甕の《曲水の遊》にみられる震えるようなフォルムは方久斗の《雨月物語絵巻》(大正二・一三年)を先取りするかのようである。⁽³⁾

なお『新作精華』第三巻第二輯の図版より、前述の「光の水墨画 近藤浩一路の全貌」展に出品された近藤浩一路の《水郷》(個人蔵)と小川千甕の《田舎楽》(京都国立近代美術館蔵)が、珊瑚会第六回展の出品作であることが判明したのも、最後に特記しておきたい。

註

- (1) 現在、東京文化財研究所が所蔵する『新作精華』の内訳は次の通り。
第三輯、第二巻第二・四輯、第三巻第一・三・六・八・一〇輯、第四巻第一輯
なお他に『新作精華』を所蔵する公共機関としては、東京都現代美術館美術図書室(第三輯・第五輯、第二巻第三・四輯)、東京芸術大学図書館(第二巻第五輯)がある。
- (2) 小林壽一が手に入れた断簡はその後、大倉喜七郎の収集を経て、現在是他家の所蔵となっている。馬場あき子・NHK取材班『秘宝三十六歌仙の流転 絵巻切断』(日本放送出版協会 昭和五九年四月)を参照。
- (3) 玉村方久斗については、神奈川県立近代美術館・京都国立近代美術館『日本画変革の先導者 玉村方久斗展』図録(平成一九年一月)を参照。

(きくや よしお・山口大学)

(しおや じゅん・企画情報部文化形成研究室長)